

INTERVIEW：インタビュー

NHK連続テレビ小説『虎に翼』
制作統括、チーフ・プロデューサー

尾崎 裕和さん

4月から放送されるNHK連続テレビ小説『虎に翼』のモデルは、日本初の女性弁護士の一人三淵嘉子さん。三淵さんは、明治大学専門部女子部法科で学んだ後に弁護士となり、戦後は裁判官となりました。女性として初めて、裁判所長も務めています。

今回は、同作品の制作統括を務める尾崎裕和さんに、制作にまつわるお話を伺いました。『ゲゲゲの女房』『マッサン』『あさが来た』『エール』といった連続テレビ小説（朝ドラ）や、『天地人』『軍師官兵衛』『鎌倉殿の13人』といった大河ドラマを多数手がけてきた尾崎さんが、本作品に込める想いとは。

聞き手・構成：濱島 幸子、小石川 哲
写真撮影：小石川 哲



— なぜ、プロデューサーを目指されたのですか。

小学生ぐらいの頃から、すごくテレビドラマが好きで。私は出身が鳥取県なんですけど、住んでいる所がかなり田舎の方だったので、都会的なものが何もなかったんです。1990年代はテレビドラマがすごく視聴率を取っていた時代で、キラキラしたドラマをたくさんやっていたので、そういう世界に憧れてドラマを作りたいと思いました。

— プロデューサーの具体的な役割はどのようなものなのでしょうか。

『虎に翼』では制作統括として、企画の一番最初の何もない段階から、企画内容、誰に脚本を書いてもらうか、誰に出演してもらうかなどをイチから決めていきます。スタッフと出演者を固めていきながら、作家さんと脚本をどんな内容にするか打ち合わせをし、収録が始まったら、収録したものを編集してポスプロ（注：撮影後の技術的仕上げ作業）で放送に出す形にしていきます。その要所要所で確認してOKを出し、それぞれのパートはプロフェッショナルなスタッフに任せながら、全体を統括して、放送、放送後も含めてですけど、全体のプロセスを管理・

統括することが役割です。

— 尾崎さんは朝ドラや大河ドラマを担当されていることが多いですが、それはご希望されてという形なのでしょうか、それとも抜擢されるものなのですか。

先ほどテレビドラマが好きだったという話をしましたが、大河ドラマが特に好きだったんです。NHKでドラマを作れたら、大河ドラマの現場に行けるかなと思って就職試験を受けたので、大河ドラマはすごくやってみたいと思っていました。ただ希望すればできるわけでもないで、運とめぐり合わせの部分も大きいと思います。

— 朝ドラや大河ドラマならではの良さ、というものはあるのでしょうか。

朝ドラや大河ドラマは放送する期間がとても長いことが魅力の1つだと思っています。長いことで日々の生活に密着できる良さがあると思います。放送が長いということは収録も長期間におよぶのですが、そんなドラマを毎年制作する体制を持っているのはNHKだけだと思うので、それはとても強みだと思っています。

——逆に、クールが長いドラマならではのご苦労はありますか。

どうしてもドラマの中の季節の設定と、実際の撮っている季節の設定を合わせるのが難しいです。1年期間があったとしても、1年の中で春は1回しか来ないので合わせて撮ることができないんです。最近はいわゆるCGとかVFXの技術があるので、枯れ草ばかりだけど、背景の色味を若草色にしたりとか、CGとして描いたりとか、そういうこともできるので映像上の工夫はやり様があります。

——担当される作品で、心掛けていらっしゃることはありますか。

企画をするときは、現代の人たちが見て、何か響くテーマであったり、何か考えられる内容であったり、今の時代に作る意味みたいなことを考えることが多いです。今回の『虎に翼』も、三淵嘉子さんという方をモデルにして過去の話を作るんですが、現代の視聴者の皆さんが見て、共感できることであったり、何かちょっと心に残ることがあったりする作品になればいいなと企画をしました。

——関わった作品の中で、特に印象に残っているものはありますか。

『恋せぬふたり』という作品があって、それは『虎に翼』の脚本家の吉田恵里香さんに執筆していただいて、私がプロデュースをした作品です。アロマンティック・アセクシュアルの方たちを主人公にしたドラマで、繊細なテーマだったんですけど、吉田さんも僕もすごくいろいろな勉強というか、取材をして作ったドラマで、たくさんの方に見ていただいて、賞という形で評価もいただきました。

——『虎に翼』で、女性初の弁護士を取り上げることになった経緯を教えてくださいませんか。

私が朝ドラをやることが決まったときに、脚本を吉田さんに書いていただこうというのは最初に決めました。吉田さんと一緒に、朝ドラとして半年間、

視聴者の皆さんに楽しんで見ていただける題材って何だろうかというのを考え始めて、どなたかモデルとして描けるような方はいないかなといろいろ探して、それで三淵さんに出会ったんです。三淵さんが女性初の弁護士であり、戦後は裁判官になり、ずっと法曹の現場で活躍された方というのもあって、この方をモデルにすると、朝ドラとしてとても豊かな物語が描けるんじゃないか、というのをみんなで話して決めたという感じです。

——今回は、脚本家さんが先に決まって、そこからテーマを作っていたんですね。

いろいろなやり方があるんですけど、『虎に翼』に関してはそういう形で、吉田さんも三淵さんを主人公のモデルにして書きたいと言っていたので、満場一致で決まりました。

——『虎に翼』については、史実とフィクションの部分というのはどのぐらいの割合で織り交ぜているのでしょうか。

主人公の名前を猪爪寅子としているように、三淵さんをそのまま描くわけではありません。三淵さんの実績なりキャリアに対しては、敬意を持ってきちんと描いていくんですが、ドラマとして、フィクションとして再構成されているものと思って見ていただけたらなと思います。

——『虎に翼』というタイトルについては、怖すぎる、朝ドラらしくないというご意見があった中で選ばれたということですが。

主人公の寅子（ともこ）の名前は、寅さんの「寅」にしているんですが、それは三淵さんが、五黄の寅年生まれだったというのがあって。寅にちなんだタイトルもあるのかなといろいろ調べたら、「虎に翼」という韓非子の言葉があるというのがわかったんです。鬼に金棒みたいな感じで、ちょっと怖い印象があるんですけど、寅子が法律という翼を得て、世の中に羽ばたいていくイメージが、女性が法律を学ぶことで、世の中でとても前向きに生きていけるというイメージに

ぴったりくるところがあったので、このタイトルにしました。

——三淵さんの人柄や生涯については、どのように感じられていますか。

三淵さんの追悼文集があって、ご家族だったり、昔の同級生だったり、弁護士や裁判官の同僚の方が、三淵さんの思い出を書いているんです。ご家族に対しては結構いろいろ言う人だったとか、家庭裁判所で少年に説諭をするときは聞いている書記官が泣いちゃうようなお話をされていたとか、女学校時代はいろいろな歌を歌っていたとか、そんなエピソードがたくさんあって。人としてとてもチャーミングで、魅力的で、みんな三淵さんのことが好き、みたいな感じの文集だったので、すごく尊敬もできるけど、好きになれる人物なのかなと思いました。

——伊藤沙莉さんに主演をオファーした理由として、お芝居はもちろん、三淵さんの雰囲気とちょっと似ているとおっしゃっていましたが。

そうですね。伊藤さんて等身大というか、そんなに緊張感を抱かなくていいという変な言い方ですけど、横にいらっしゃっても自然に私たちもリラックスさせてもらえる、とても気さくな人柄なんです。一方で、ちょっと豪快なところもあって、細かいことは気にせず、全然OK、みたいなところもあります。すごく親しみの持てるキャラクターでいて、頼りにもなるというか、この人にちょっと困ったときに相談したらいいことを言ってくれるんじゃないか、という感じがするんです。三淵さんて、すごく親しみも持てるし、エピソードを拝見すると豪快なところもあって、二人のキャラクターに通じるところがあるのかなと思いました。

——尾崎さんが感じる三淵さんが生きた時代と現代の違いはありますか。

当時の、それこそ戦前の旧民法であるとか昔の法律には、こんなことが書いてあったんだと思うことが

ありますが、現代になって女性にとって不利だった法律が変わっても、変わっているはずなのに世の中は変わってないと感じることが多いというか。昔はこうでした、今はそうじゃない、ではなくて、昔はこうでした、でも、なんとなく今もそうなんじゃないか、と感じることがあります。

——三淵さんが学んだ明治大学を訪問されたときは、どんなお話をされたんですか。

まず明治大学にあった女子部法科という、日本で初めて女性に法律を専門で教える学校、専門部があったということがすごく魅力的でした。企画の中でも女性たちが法律を学ぶ学校があったというのはとても重要なことだと思ったので、まずは資料がある明治大学さんに行こうということで伺ったんです。当時の女子部の生徒さんたちがどんな建物に通っていたとか、どんな制服だったとか、あとは名簿が残っていたので、当時何人くらい通っていたのかとか、登場人物の中にもいるんですけど留学生の方、朝鮮半島や台湾、中国本土から来た方の名前が名簿の中にあっただけで、そういう歴史的事実もお聞かせいただきました。

——ドラマの中で実際に留学生が登場するんですね。

そうですね。当時は高校を卒業して、そのまま入ってくるという一律の感じではなくて、三淵さんは女学校を出てすぐ入られたみたいですけど、世代としても例えば40代とか50代とかお子さんがいらっしゃるような方が入学してきたというようなことも書かれていました。ここで法律を勉強できるということで、いろいろな女性が集まってきて、海外からも来たということが名簿からも分かったので、そういう登場人物がいてもいいんじゃないか、というのを考えました。

——本作品のロゴに昔の法服の胸元に描かれていた唐草模様が使われていますが、法服については何か話題に出ましたか。

昔は法曹三者が着ていて今は裁判官だけ着ているというのは、ある種権威の象徴みたいな感じはしますね。ドラマでも、戦前の裁判を再現するので、弁護士も法服を着ているというのをやるんですけど、みんなが着ていると、より儀式めいている感じがします。『ハリー・ポッター』みたいだと言いながら衣装を着たりしています。でもすごくおしゃれというか、印象的な模様なので、昔の法服、かっこいいなと思います。

——尾崎さんも本作品を機に裁判傍聴に行かれたそうですが、傍聴されたのはどんな事件だったんですか。

何件も見たんですけど、とても印象に残っているのは、高齢のおばあちゃんがコンビニでペットボトルを盗んだという刑事裁判です。注目されるような裁判じゃないから傍聴しているのは僕と何人かだけで、言い方が難しいんですけど、最初はペットボトル1本盗んだぐらいでこんな裁判をやるのかという感じで傍聴していました。聞いてみると、そのおばあちゃんは再犯らしくて、たぶん何回もやっちゃってここまで来たんだろうという方で。でも、裁判官も検事も弁護士も結構若手の方だったんですが、皆さん、おばあちゃんの話ちゃんと聞いて、すごく頑張っているという感じがしたんです。裁判をちゃんと成立させるというか、日本という国家において、こういう制度があることできちんと世の中が回っているというか、正義が成されるというか。裁判で人を裁くって本当は大変なことじゃないですか。でも、耳が聞こえづらそうで、もしかしたら認知症かもしれないおばあちゃんに対して、本当にいろいろなことを一生懸命聞いている、こうですか、ああですかみたいなことをやっているのが、僕はすごく印象に残って、心を打たれたというか。普通なら、おばあちゃん、分かった、もうこういうことだよ、でいいやと思っちゃいそうなのに、しっかり手続きをふんで、おばあちゃんの言い分をふまえた可能性を考えていて、とても好感を持ったというか、言い方はあれですけど、何かいいなと思ったんです。

——傍聴は皆さんで行かれたんですか。

最初は僕一人でふらっと行ってみたんですが、その後で出演者の伊藤沙莉さんやスタッフたちとも傍聴に行っています。

——この作品に関わる前は、弁護士に対してどのようなイメージを持たれていましたか。

どうですかね。いろいろな人がいるんだろうなとは思っていました。社会正義のため、弱い人のために頑張っている方もいるだろうし、ドラマっぽいですけど、企業関係でのごお金を儲けまくっている人もいるんだろうなという（笑）。中間も当然いらっしゃると思うんですけど、ちょっと両極端なイメージを持っていたかもしれないですね。

——最後に、尾崎さんが『虎に翼』を通じて、皆さんに伝えたいことを教えてください。

猪爪寅子という1人の女性が、弁護士、裁判官と法律の仕事歩んでいく中での様々な困難や喜び、仲間との出会いなどを長い人生のスパンで描いていこうと思っているので、そこに対して共感していただいたり、心を動かされたりしながら、寅子と一緒に人生を体験してもらえそうなドラマになればと思っています。当然、女性の方には共感できたり、心を寄せて見ていただけるものになっていると思うんですけど、皆さんが楽しめるドラマになっていると思うので、たくさんの方に見ていただけたらいいですね。

プロフィール おさき・ひろかず

1980年鳥取県生まれ。2002年日本放送協会（NHK）入局。地域放送局勤務を経て、ドラマ番組部へ異動。2009年の大河ドラマ『天地人』の演出をはじめとして、数々のドラマ制作を手掛けている。

近年の主な作品 〈プロデューサー〉

NHK によるドラマ『ソノビが来たから人生見つめ直した件』（2019年）
NHK によるドラマ『腐女子、うっかりゲイに告る。』（2019年）
〈制作統括〉
NHK 連続テレビ小説『エール』（2020年）
NHK によるドラマ『ここは今から倫理です。』（2021年）
NHK によるドラマ『恋せぬふたり』（2022年）
NHK 大河ドラマ『鎌倉殿の13人』（2022年）